

教育・研究等業績一覧

履 歴					
フリガナ	オカダ カナコ	性別		生年	
氏名	岡田 佳菜子	女		1971年	
所属	農学ビジネス学科	身分	准教授		
学 歴					
年 月	事 項				
1993年3月	金沢大学 教育学部 小学校教員養成学科 卒業				
1993年4月	山形大学大学院 農学研究科生物生産学専攻 入学				
1995年3月	山形大学大学院 農学研究科生物生産学専攻 修了				
1995年4月	岩手大学大学院 連合農学研究科生物生産科学専攻 入学				
1995年6月	フィリピン国際イネ研究所 リサーチスカラー				
2001年3月	岩手大学大学院 連合農学研究科生物生産科学専攻 単位満期退学				
職 歴					
年 月	事 項				
2002年9月	富山県林業試験場 臨時職員				
2004年4月	拓殖大学北海道短期大学 環境農学科 専任講師				
2007年4月	拓殖大学北海道短期大学 環境農学科 助教（職位名改称）				
2009年4月	拓殖大学北海道短期大学 環境農学科 准教授				
教 育 業 績					
1 担当授業科目（2019年度）					
科 目 名	出講場所	期別	曜日	時限	備 考
水稻生産学	202	前期	金	3	
農業基礎実験・実習	実習棟	通年	火/木	4, 5/4, 5	
水稻実習	実習棟	通年	水	1, 2	
1年ゼミナール	ラボ室	通年	水	3	
2年ゼミナール	ラボ室	通年	水	4	
卒論演習		通年	随時		
作物栽培概論	201	前期	木	1	
保育内容 I	103	前期	火	2	
2 現行授業の目標と教育効果及びそれに対する自己評価					
（記述式：900字以内）	<目標と教育効果> 1年次は資料の数値や実習圃場の観察を通して、実際に生じている「真実をとらえる力」を養うことを目指す。さらに、卒業までの2年間を通じ、事実をもとにどのように判断をするべきか、「考える力」を引き出す。農業は、常に気づき考え、行動することが大切であると考えている。 「読む、聞き取る、書く」の基礎学力の低下が目立ち、情報を読み取る力が急速に低下している。1年ゼミナールを活用して、新聞記事の要約を何度も繰り返し行った。少人数制の授業であることから、自分の気に入った新聞記事の要約と感想をテーマに進めた。起承転結を読み取ることを訓練し、個々の改善が認められた。人の話を聞き取る力も低下している。まず、メモをとり、復習することが大切である。 2年次の卒論演習では、1年を通して、各自のテーマに合わせて、考え、動くことに取り組んでいる。各個人が試験の意味、データの意味を考えられるよう、手掛かりをだしながら、学生の考えを引き出すよう努力してきた。				

3 学生による授業評価も踏まえ、教育改善への取り組み (記述式：900字以内)	<授業評価および改善> 1・2年生の座学では、理解力をあげるため毎授業ごとに小テストを取り入れた。 上記の自己評価・学生評価をふまえ、双方向の授業となるよう努力したい。授業中の集中力の低下が近年著しい。
4 教科書、教材の作成状況 (記述式：300字以内)	本学実習圃場の活用 図表を記載したプリントの使用 授業ごとの質問票の配布 反復授業（予習、復習を授業に取り入れる）
5 学生の指導（課外活動・厚生補導等） (主要10件以内)	2005年～ 卒業論文 指導 2006年8月 カナダ研修 引率 2008年～ 茶道部 顧問 2013年～ 剣道同好会 顧問
6 その他 (主要5件以内)	2015年12月 剣淵高校実績発表会審査員

研 究 業 績

1 研究分野・活動 (記述式：350字以内)	北海道の水稲栽培において、主に土壤肥料分野の改善を目的とする。主要活動は以下の2点となる。 (1) 北空知の水稲初期生育障害 (2) 水稲移植栽培における尿素施肥法の検討 (3) 水田土壌の乾土効果
2 研究課題 (今後の展開・可能性を含む) (記述式：350字以内)	・北空知の水稲初期生育障害の原因の解明を土壤・作物栄養学の面から明らかにする。 ・移植栽培では塩安や硫安が窒素質肥料として一般的であるが、海外では尿素が一般的である。また、一農家あたりの経営面積の増加に伴い、施肥後の肥料混和の遅れることが想定される。そこで、窒素あたりの価格が最も安い尿素的施肥方法を肥料混和時期とともに検討し、水稲栽培におけるコスト低減に取り組む。
3 研究助成等 (主要5件程度)	(1) 文部科学省科学研究費 (2) 学内 拓殖大学準実験系 拓殖大学理工学研究所助成 (3) 学外 朝日工業株式会社
4 資格・特許等 (主要3件以内)	2001年3月 博士（農学） 1993年3月 小学校教員一種免許 1993年3月 農業高校一種免許

著書、学術論文、作品等の名称 (主要15件以内)	単著、共著の別	発行又は発表の年月	発行又は発表雑誌等又は発表学会等の名称	要 約
<学位論文>				
Water and nutrient uptake characteristics in upland rice.	単著	2002年3月	岩手大学大学院	陸稲の養水分吸収特性を明らかにした
<学術論文>				
不耕起移植水稲の初期生育と登熟期の特徴について	共著	1998年2月	日本土壤肥料学雑誌	不耕起水稲の根の発達と登熟の関係を明らかにした p. 618-625
Water uptake under water stress at panicle initiation stage in upland rice as affected by soil water regimes.	共著	2002年2月	Soil Science and Plant Nutrition	土壤水分が陸稲の根の発達・水分ストレス下の吸水、耐乾性に与える影響を明らかにした p. 151-158
Basal phosphorus application and water uptake during mild water stress of upland rice in column experiment.	共著	2004年4月	Soil Science and Plant Nutrition	陸稲におけるリン酸施肥と根系の発達・水分吸収への影響を明らかにした p. 257-204
北海道における水稲湛水直播栽培（落水出芽法）の生育特性	共著	2008年7月	北農	水稲湛水直播栽培の生育特性を移植栽培と比較 p. 34-38

日本のグリーン・ツーリズムにおける農業・農村体験の意義	共著	2009年3月	拓大紀要		
水稲湛水直播圃場における生育分布	共著	2012年12月	日本土壌肥科学雑誌	水稲湛水直播栽培における圃場内の生育分布を明らかにした。	
北海道の水稲湛水直播栽培における土壌中アンモニア態窒素と窒素吸収	共著	2014年6月	日本土壌肥科学雑誌	水稲直播栽培における生育書記の土壌中無機態窒素量と植物窒素吸収量の関係を明らかにした。	
北海道北空知地域の水稲初期生育障害	単著	2015年3月	人文・自然・人間科学研究(拓殖大学論集)	北空知の水稲初期生育障害の症状を明らかにした。	
生育と葉色診断による直播水稲への施肥対応 共著	共著	2017年9月	日本土壌肥科学雑誌	北海道における水稲湛水直播栽培において、幼穂形成期の草丈と茎数の積値により植物体窒素吸収量を推測でき、窒素栄養診断方法として適切であることを明らかにした。	
<著作>					
日本土壌肥科学会北海道大会記念誌 (水稲担当)	共著	2010年7月	日本土壌肥科学会	北海道と府県の水稲の生育および養分吸収特性をまとめた。	
比べてみれば 水田のはなし	単著	2016年1月～8月	ニューカントリー	現場で役立つ施肥と栄養生理の基本を、拓大のデータを軸に、府県や海外との比較を交えながら解説	
北海道の湛水直播栽培における窒素施肥と収量・品質	単著	2017年2月	農業技術体系 2-1	北海道の湛水直播栽培における窒素施肥の問題点と原因そして解決策を解説。北海道では、窒素栄養不足を生じやすく、その解決方法として、栄養診断に基づく追肥と緩効性肥料の使用方法を解説した。また、圃場内の生育ばらつきも大きくなることから、可変施肥の必要性を説明した。	
研究業績 (過去3カ年分)					
著作数	論文数	学会等発表数	その他	国際的活動の有無	社会的活動の有無
0	1	4	0	無	有
学 内 運 営 業 績					
1 役職、各種委員会等 (主要10件程度)	2006年～	農場管理委員会、委員長 (2013年～)			
	2006年～2008年	学生委員会			
	2009年～2012年	入試広報委員会			
	2013年～	教務委員会			
	2013年～	ネットワーク委員会			
学 外 活 動 業 績					
1 本学以外の機関(公的機関・民間団体等)を通しての活動 (主要10件程度)	2010年10月～	北海道中山間地域等総合対策検討委員会 委員			
	2013年8月	JICA 青年研修「ベトナム農村振興コース」 講話			
	2013年～	北海道道州制特別区域提案検討委員会委員			
	2018年9月	土壌肥科学会水田を肴にする会 話題提供			
	2018年11月	北ブロック農協青年大 講話			
	2019年1月	とんぼの未来・北の里づくり子供絵画コンテスト2018 審査委員			
2 学会・学術団体等の活動 (主要10件程度)	日本土壌肥科学会 会員				
	日本作物学会 会員				
	根研究会 会員				
	北農会 会員				
	北海道有機農業研究会 会員				